



あなたにぴったりの湿地は

ウトナイ湖



こんなところ ↓

ウトナイ湖



中村 聡（（公財）日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ）

石狩湾から太平洋にいたる石狩低地帯には、かつて多くの湖沼が点在していた。しかし、土地利用の変化に伴い、農地や市街地へと大きく変貌を遂げた結果、その大半は消滅し、現在では最大面積のウトナイ湖、それに次ぐ弁天沼などを残すのみとなっている。

石狩低地帯の南部に広がる勇払原野周辺は、今から約 6,000 年前までの縄文海進期*には海だったが、徐々に海岸線が後退し、また、海流の作用により、多くの砂丘が形成された。その過程において、閉ざされた低水域が海跡湖・沼としていくつも残り、その一つが北西端に位置する現在のウトナイ湖である。面積は約 275 ha、周囲は約 9 km、平均水深は約 0.6 m の淡水湖で、苫小牧市の中心部からは北東に、わずか約 11 km の距離にある。

周辺の表層には、約 4 万年前の支笏火山噴火による火砕流堆積物とそれを覆う軽石質の火山灰が、深いところで 100 m を超える厚さで堆積している。付近の地形は沖積低地と丘陵に大別され、前者の平坦地（氾濫原）や谷沿いに湿原が広がる。



オオハクチョウが舞い降りるウトナイ湖
厳冬期は、ほぼ全水域が結氷する

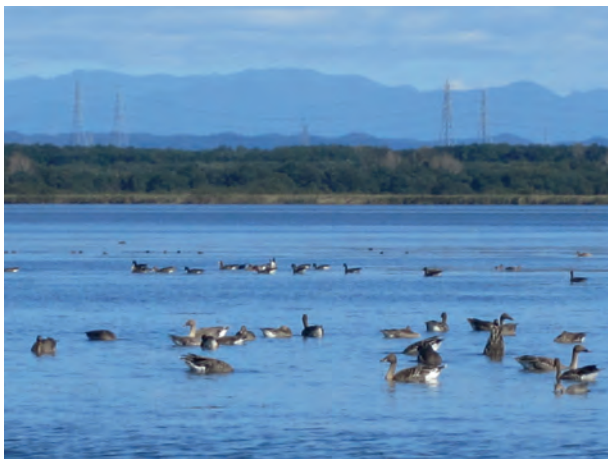


上空から見たウトナイ湖

北海道のカタチに似ている？

ウトナイ湖を含む勇払原野は、釧路湿原やサロベツ原野とともに、北海道三大原野として並び称され、その面積は過去約 70 年間で著しく減少したものの、残された多様な自然環境には、絶滅のおそれのある鳥類も多く生息している。ラムサール条約湿地、ウトナイ湖の鳥類相について、少し紹介しよう。

日本野鳥の会がウトナイ湖サンクチュアリを開設した 1981 年から 2020 年までの約 40 年間に、ウトナイ湖で記録された鳥類は 274 種にのぼる。なかでも、サギ科やカモメ科などの「水鳥」は 17 科 125 種が記録されており、これは全確認種の約 46% を占める。「水鳥」のうちカモ科に属するのはガン類 8 種、ハクチョウ類 3 種、カモ類 26 種である。



マガンやヒシクイが休む、秋のウトナイ湖



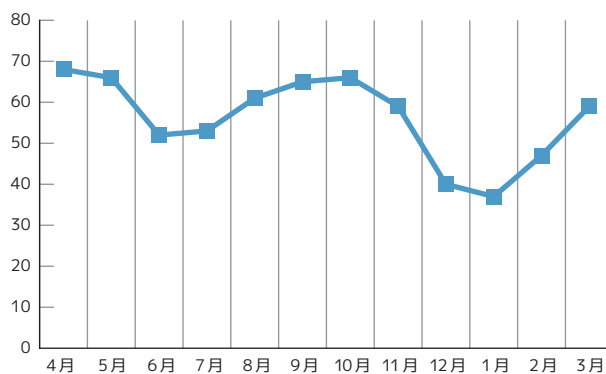
初夏にはコヨシキリがさえずる

年間でみると、毎年約 130 ～ 180 種の鳥類が確認されるが、2019 年度（2019 年 4 月～2020 年 3 月）は 131 種だった。このうち、主に水域に生息する鳥類は 47 種（36%）、主に陸域に生息する鳥類は 84 種（64%）である。また、ほぼ 1 年を通して確認された鳥類は 28 種（21%）に過ぎず、それ以外の 103 種（79%）は渡り性の鳥類（^{わた}渡り鳥）、または年に 3 回以下の記録しかない鳥類である。年 3 回以下の記録しかなかった 39 種を除くと、渡り鳥 64 種のうち、主に 4 ～ 8 月の繁殖期に観察された、いわゆる「夏鳥」は 31 種（48%）、主に 12 ～ 2 月の越冬期に確認された「冬鳥」は 15 種（24%）、主に春と秋のみ確認された「旅鳥」は 18 種（28%）であった。

勇払原野の一角にあるウトナイ湖
市街地や新千歳空港にも近い

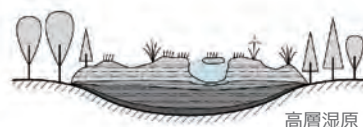
これらのことから、ウトナイ湖周辺は夏鳥の繁殖地^{ちゅうけいち}として、また、旅鳥の渡り中継地^{ちゅうけいち}として、あるいは冬鳥の越冬地^{えっとう}として利用されていることがわかる。

2019 年度に確認された種数の変化を月別に見ると、グラフに示すとおり、4 月が 68 種でもっとも多く、次いで 5 月と 10 月の 66 種、9 月の 65 種だった。これらの月は、夏鳥・冬鳥・旅鳥と、さまざまなタイプの渡り鳥が同時期に記録されるためと考えられる。



2019 年度に確認された鳥類の月別種数

* 最終氷期の終わり頃から始まった海水面の上昇。ピークは縄文時代の約 6,000 ～ 6,500 年前で、現在よりも数 m は海水面が高かった。



高層湿原